掌編連作「怪」

白馬　黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
掌編連作「怪」

【Ｎコード】
Ｎ９７９６Ｑ

【作者名】
白馬　黎

【あらすじ】
此処は神霊の降臨し命無きものの舞ひたる国。二世紀成立・干宝「搜神記」をまねた漢文風の創作怪奇物語。
全六作（一作あたり原稿用紙換算二～六枚）、完結済み。
（重複投稿：本家サイト「Ｅｍｐｔｙ　Ａｉｒ」）

舞姫の怪

都に鬼の出でたる館あり。一道人、命を受けて館へ赴くに、更夜、白き影の顕るを見ゆ。影すなはち牡鹿に騎りたる舞姫と化す。艶なる衣装まとえど、無貌たり。「妾、この日を待ちにけり」と舞姫申して、扇をもつて一室を指す。袖・裾につけたる鈴かき鳴らし、ひよん、ひゆうよん舞いにけり。

「これが毎夜のことなるか」と道人尋ねるに、館の臣、答へて曰く「左様なり」と。「何時からか」と重ね尋ねれば、「我が主の加冠せし日より。主の姓は趙、名は泰、遠く漢王の血を引くお方なり。舞姫指すは主の居室なり」と答ふ。

「はてさて幽鬼か怪異のなすものか。幽鬼ならば御霊を鎮めるも、怪異ならばここで絶つ他なし。もし」道人呼ばわるも、舞姫答えず。「答えられよ、望みは何か。幽鬼ならば我救ふも、怪異ならば目鼻立ちの定まらぬうち斬る他なし。名は何と」道人重ね呼ばわるも舞姫また答えず。「名が無きとは、やはり怪異。幽鬼ならば名有るもの。ならば斬るより他になし」と道人申すや、すなはち刀抜き放ちて姫を斬らん。

舞姫の首在りしところに一人形在り。その衣、さきの舞姫と等しき色かたちなり。また牡鹿の首在りしところに牡鹿の剥製あり。「これは何ぞ」と道人問ひけるに、臣答へて曰く「蔵に収めしものなり。主、少時、蔵に入りて遊ぶを好む。人形、主に恋せしか」と。

「命なきものが動き出すとは不吉の予兆。火を焚きて燃すべし」と道人申すに、臣言われるまま薪をとつて火を熾さん。舞姫・剥製をくべるに、あなやと言ふ間に燃え上がり、火の粉の泰が居室に降りかからん。牡鹿、舞姫を騎せ焔を超え出でたるに、焔をまとひて馳走す。居室を仰がば扇を持ちて舞ふ男の姿有り。「我もまた汝を待つ」とて泰、姫を迎ふ。すなはち館、燃え崩れり。

炎の失せし後、臣僕、主君の姿を求むるに、逃れたる気色もなか

れど遺骸なし。ただその跡に煤けし鹿角在るを見ゆのみ。

舞姫の怪（後書き）

鬼（き）（漢文では）幽霊。
加冠（かかん）成人。
馳走（ちそう）馬などを走らせること。

鬼瓦の怪

一職人在り。日々土をこね、器、甕などを作る者なり。

一客在り。職人の器を求むるに、応対せし妻に惚るる。すなはち口説きて連れ帰らん。職人すなはち追うも、妻の心、客に移ろふ。職人、泣きて一人、工房へ戻る。妻への怒り、客への怒りを粘土にぶつけ、鬼瓦を造らん。

焼き上がりの後、一友人来たりてこの鬼瓦を欲す。職人、金を取らずして譲る。鬼瓦を飾りし友人の宅、たちまち商売繁盛、金銀財宝満ち溢る。友人、謝して職人の名を広む。職人、喜びて瓦を造る。しかれど鬼瓦を飾りし家々、悪鬼を呼びて次々斃れん。呪い瓦と恐らるる。

「幸福を祈りながら造るのに、私の瓦は悪鬼の瓦、福を遠ざけ呪いを招く」

職人むせびて瓦造りを止む。しかれどかつて造りし鬼瓦、ぐわつと目をむき牙をむき、瓦を造れ、造らねば食うてやるぞと脅しくる。職人病に伏し、にはかにむくりと起き上がるや、自ら般若の面を造り昼夜を問わず面を被りて瓦を造る。

職人の元妻、その狂気を知りて深く悔う。

「あなたさまの呪い瓦が私どもへの恨みなら、その鬼瓦でもって罰したまえ」

職人は土を鍛えん。憎しみにて造られし鬼瓦、牙をむき出し目をつりあげ、商売繁盛、子孫繁栄、悪鬼を遠ざけ福招く。かの家たちまち金銀財宝満ち溢れ、錦の着物を重ね着て、ただ妻ばかりが浮かぬ顔。

「罰してほしいと、罰して欲しいと願ったのに。これでは償いようがない」

ひとりむせぶ妻の寝所に鬼面の男、現れん。

「いつか君等の幸せを、心から願えるその日まで。その日に又、鬼

瓦を届けよう。それまではただひたすらに、ひたすら幸せに生きてくれ」

悲しく笑ひて消え去りぬ。

石馬の怪

崑崙に石馬有り。周囲の民これを祀るに、百年にして命を得。民これを怪しみ畏れ、王にこの馬を献上す。

王に男児あり。馬、この男児を見ゆに、人語を発す。「我は神馬なり、汝を婿に欲す」と。王子、「汝、神馬ならば我その証を欲す。真ならばその額に角を生ずべし」と。明朝、馬の額に一角有り。王子、驚き畏れて逃るるに、馬怒りてその角をもつて王子を刺し殺さん。

王怒りてこの馬を殺さんと欲するに、馬、背に翼を得て去る。王、これを追わしむに、崑崙の山中に石馬有り。その瞳より水を生じ、その足元に泉を造らん。王、これを憐れみて、人夫をして石馬を王子の墓前に移しめんとす。墓の横に移されし石馬、再び命を得て王の足元に平伏し、長き首もて王子の墓石を抱き、復た命を失うも、その涙いまだ茫々たり。訪れし人々、その涙をもつて手を濯がん。

数日の後、墓前に若き馬あり。王の傍に侍りて離れず。王、「これは王子と石馬の子に違わず」とて連れ帰り、乗馬と成す。数年の後、一日にして千里を駈ける駿馬となりて王に長く仕ふ。

某時、王を弑したてまつらんとする刺客あり。駿馬、額に一角を生じて刺客を殺さん。王、駿馬の子を望むも、駿馬成さず。王の病を得て身罷ると共に駿馬死せり、その血も絶ゆ。

火焔の怪

左軍に張臨なるもの有り。勇にして多力なり。

臨ある時、一村を過ぎるに、村の民の集まりて焔を囲むを見ゆ。「これはいかに」と臨問ふに、「火精に罪人を問ふ」と民答ふ。見れば火前に男二人有り。一男の火中に手を差し入れたるに、爛れず。次の男、同じやうに手を差し入れたるに、見る間に爛る。この男すなはち縛され、先の男の放せらる。

「これは面白き」とて臨、二僕を呼ぶ。「先日、我が杯を割りしはいかに」と臨問ひて、「我はいかに」と焔に手を入るるに、熱無くただ微風のごとき心地すのみ。臨、一僕に命じて手を火中に入れさしむ。臨、自ら答を知る。杯を割りしは別の僕なり。しかれどこの僕の手、すなはち爛る。

臨怒りて、「これ冤なり。精を騙りて過ちを成すとは許すまじ」と剣抜き放ちて火中へ振り下ろしたるに、焔、忽焉にして沸き立ち臨を襲ふ。身を焦がさるるも臨恐れず、火中の影を掴む。焔より引き出されし影、紅き鼬のごとし。焔より出でたると共に死す。すなはち焔鎮まれり。

「これ火精の正体なり。炙りて食ふべし」とて、その皮をはぎ四足を縛りて火中に投ずに、すなはちこれ生き返りて臨を襲ふ。臨、再びこれを捕らへて殺し、八つ裂きにして湯中に投ず。すなはちこれ八つの化物となりて臨を襲ふ。臨、剣をもつて全てを打ち倒し、生のままにこれを食らふ。

臨は火精の気を得てますます勇となるも、その気にあたりて品を貶め、賊の長に身を堕さん。

火焔の怪（後書き）

忽焉（こつえん）　突然。

竜宮の怪

蘇賀は盗の罪を問はれ、今罰されんとする罪人なり。手足を縛され碇を結ばれ、海中へ沈められたるに、何の故にか呼吸能ふ。役人去る後、岩をもつて縄を絶ち、兎にも角にも地上へ戻らんと海中を往くこと数里、海豚に騎りて賀が元へ向かう人有り。この人もまた海中にて呼吸能ふ。蒼き衣冠まとひて指間に鰭あり。

「我は鮫人、竜王に仕へし水界に住まふ民なり。汝もまた鮫人なり、過ちありて人界に産まる。我と伴に参れ、竜王汝を招く」

求められるまま従ふに、幾許ばかりかを知らず。一洞穴あり、入るに鮫人の都に通ず。住居は地上と大差なかれど、瓦に代わりて貝、火に代わりて宝玉・海蛍をもつて灯明となす。鮫人は常人と姿かたちに大差なかれど、その海中を往くさま、空を舞ふかの如し。馬に代わりて海豚、牛に代わりて大亀を使役す。

先の鮫人に従ひて往くに、一大城有り。これ竜宮城なり。両重門を経、数多の宮を過ぎる後、一館に入る。「しばし待て。官吏を招く」とて鮫人、館を出でる。

館に蒼竜の画有り。鱗は緑玉・真珠、瞳は金、雲霞は銀、玉は水晶なり。賀、一鱗を剥し懐に入れんとするに、鮫人還る。見咎めらるるに、賀はとつさに鱗を呑みて腹中に収めん。鮫人怒りて、「この人、我らが眷属として迎ふに値せず。去れ。人界にて罰さるるべし」とて袖を振るに、すなはち嵐起こる。賀、之に打たれて恍惚たり。

やや久しうしてすなはち蘇へるに、海岸に在る。飢ゑを覚へて歩りくに人に見咎められ、すなはち賀は捕らはれり。「死人のいかにして還るか」と獄吏問ふに、「我は海中にて呼吸能ふ」と賀、答ふ。ならばと獄吏、水瓶に賀が顔を浸しむに、賀、呼吸能ふ。「汝すなはち化物なり」とて獄吏、賀を牢に入らしむ。

賀、溺器に用を足さんとするに、異なる音有り。見れば溺器の内

に在るは溺にあらず、銀粒なり。これ腹中の鱗の所以なり。大便はすなはち金塊と化す。賀、これを賄と成し牢外へ出でんと欲すも、獄吏の手に触れるに銀粒・金塊すなはち泡沫と化し失せん。

獄吏怒るも、はてさて賀が金銀を持つ所以なし。その泡沫と化して失せること幾許かを知らず、しかれど金銀溢るるばかり。獄吏これを怪しみ恐れ、賢人にその故を問ふ。賢人説く。「これ竜宮の奇なり、この者を殺さば必ずや神罰あり」と。これによりて賀は牢を出で、漢王が舎人、韓華に囲われり。

華は富貴を求むるに、その才無し。賀を得て悦ぶも、その黄金に触れること能はず。もつて賀に技法を学ばしめ、黄金館を造らしむ。すなはちこの地は大水害を受く。数年にして華は夢幻の黄金に厭き、賀に真の黄金を造るを求む。賀、これ能はず。もつて賀を殺さしむに、水害止む。

華は飢ゑし民の刃に斃る。民の黄金館に入りてその富を奪わんと欲するに、黄金すなはち泡沫と化す。もつてますます民困窮す。

竜宮の怪（後書き）

海豚（いるか）

恍惚たり　（漢文では）意識がぼんやりすること。

溺（ゆばり）　尿のこと。

溺器（にょうき）　しびん。

妖狐の怪

一、劉乍

狐は齢五十にして人に化け、齢百にして美姫・巫女に化け、齢千にして天狐となり天竺に到りて神仙に仕ふる獣なり。

山里に老狐有り。齢五十、やうやくにして人に化けたる妖力を得。農民に化け幼女に化け、人間（じんかん）に在り戯れ暮らしつる。

某時、この狐の樵に化け、樵の留守にその家へ入りたれば、その妻子愕きて狐を迎えん。狐の肉・米を望みたれば、妻笑ひてもてなさん。狐、その児を抱きたれば、児は腕の内にて安らかに眠りたる。

振り返り振り返りて家を後にすも、狐は妻子を忘れず。すなはち狐、樵の元へ赴き、山中にて食い殺さん。その衣まとひて家に帰りたれば、妻子すなはち笑ひて迎えん。

樵が名は劉乍。狐、「我が名は劉乍。この女の夫、この児の父なり」と誓ふ。

二、鬼

一鬼有り。三更に眠りたる人を驚かせ、その怪異を鎮めたる故に捧げる供物を喰らひて暮らす。

鬼は常の如く山里をさまよひて、山中の小屋に数人の樵の伏したるを見ゆ。これ上の城を築くため木材を多く欲したるが故に、樵は里に戻る間を惜しみて山小屋に泊る。

「今宵はこの者どもを驚かさん」とて鬼、小屋の梁を叩き戸を揺らして音を生ずに、樵どもたちまち起き出し驚かん。しかれど独り、よほどに疲れしか覚めぬ樵有り。他の者は畏れてこの樵の目を覚まさんと欲するも、揺さぶれど覚めず、叩けど覚めず。鬼が顔の横に斧を落とそうとも、ただただ寝言を言ふのみなり。

鬼の次は口鼻を塞がんと枕元へ寄りたるに、すなはちこの樵、忽焉にして鬼が手を掴み、夜具の中へと引き込まん。鬼の咋咋たるも樵離さず、自らも寝具の中へ頭を引きこみ声を殺して曰く、「我は狐なり、この樵を殺し成り代わりて三年過ぐ。狐の鬼に化かされんとならば狐族の恥。我、汝を喰い殺さんと欲すも、我の狐たるを他者に知る所となるを望まざるなり。去れ。疾く去りてむ」と。鬼すなはち退散す。

鬼は里へ漂い降りて、一家を覗くに、眠りたる母子の姿あり。母は覚めて厠へ立つ。「次はこの児を驚かさん」とて小屋の戸を揺らし音を生ずに、児は怯え悲鳴す。すなはち妖狐顕れ「何の故にか我が児を襲う」と申すや鬼を食い殺さん。母還りて夫の我が児と共に眠りたるを見、愕き悲鳴す。

明朝、「乍の狐に変わるを見ゆ」との噂有り。乍曰く「我は狐に化かされたり。野山をさまよひ、更夜、里に還りたる」と。

三、変化

趙櫓は齢四十の樵なり。劉乍と共に山に入りて十年、自らは老いて重き荷を運ぶを苦とするも、乍は髪黒々として面には皺ひとつ無し。十年前に出会うその日の姿のまま今日に至らん。「何の故にか歳をとらぬ」と櫓の訊ねるに、乍は応えず。蒼き顔にて立ち去りぬ。

明朝、常の如く山に入るに一老人有り。斧・鋸を手に待つ。よくよく見たれば乍なり。一夜にして白髪となり、腰の曲がりし姿なり。櫓愕きて「何ぞその身に起こりたるや」と訊ねるに、乍は復た蒼き面にて逃げ去りぬ。

「乍の気色は尋常ならず、追ひてその故を問ふべし。妻子に不幸あらば不憫なるかな」とて樵どもの里へ戻るに、里に変事あり。見慣れぬ女の叫び走りたるあり、長老の衣まとひてその杖を手にす。見慣れぬ児あり、裸身・四足にて櫓に寄りたるその首には櫓が犬の首輪あり。さきより老ひたる乍の姿も村人どもの間にあり。一熊の

樵の衣まとひて吼えたれば、櫓も牡鹿に変じ里を駈けぬ。
翌朝、一番鶏の声と共に村人どもの元の姿に戻りたれば、「奇なこともありけるかな」と元の姿にて乍言ひけり。

四、天狐

一僧あり。法力を高めんと苦行すこと幾年かを知らず。あるときこの僧の一村を過ぎるに、葬列あり。「なんびとの葬列かを知らず、しかれど我は僧なり。経のひとつも上げん」と訪ねるに、葬なす家に妖気あり。
「なんびとぞ」とて杖を向けるに、妻が躯にすがりし老爺、もがき苦しみて僧を睨む。「汝は人に非ず、妖術をもつて人を殺めるとは何事ぞ」とて迫るに、老爺は牙をむき毛を逆立て、しかれどただただ老ひたる妻にすがるのみ。
あやしく思えど相手は妖。僧の勺杖にて迫るに、一村人の僧が前に立ち塞がりて曰く、「我は乍の人に非ずを知る、また乍が人に害成す妖に非ずを知る。見よ、これは乍が妖より集めし仙薬なり。これにてこの妻は苦しまずして世を去りぬ」と。僧の見たれば、これ万病に効きたる天狗の妙薬なり。
僧、杖をおろし「汝が望みはいかに」と尋ねたれば、乍答えて曰く「我は妻が安寧を祈らん。これより妻を天竺へ送る」と。すなはち乍は妖狐と化し、妻の魂魄を追ひ天上へと翔けん。
数日の後、乍の帰りたれば「我はいまだ齢百の狐なり、天狐と成り妻が元へ至るには残り九百の年を迎えるべし」とて妻が墓前に泣き伏さん。
その後は息子と共に村に暮らし、息子死すのちどこぞへと消え失せん。しかれど妻子の墓には献花絶えず、また油揚を置きたれば一晩のうち消え去りぬ。村の守護神とて功徳積むこと九百年、いよいよ天竺へ至りて天狐とならん。

妖狐の怪（後書き）

樵（きこり）
咋咋（さくさく）たる　ぎゃあぎゃあ喚く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9796q/

掌編連作「怪」

2011年11月16日12時56分発行